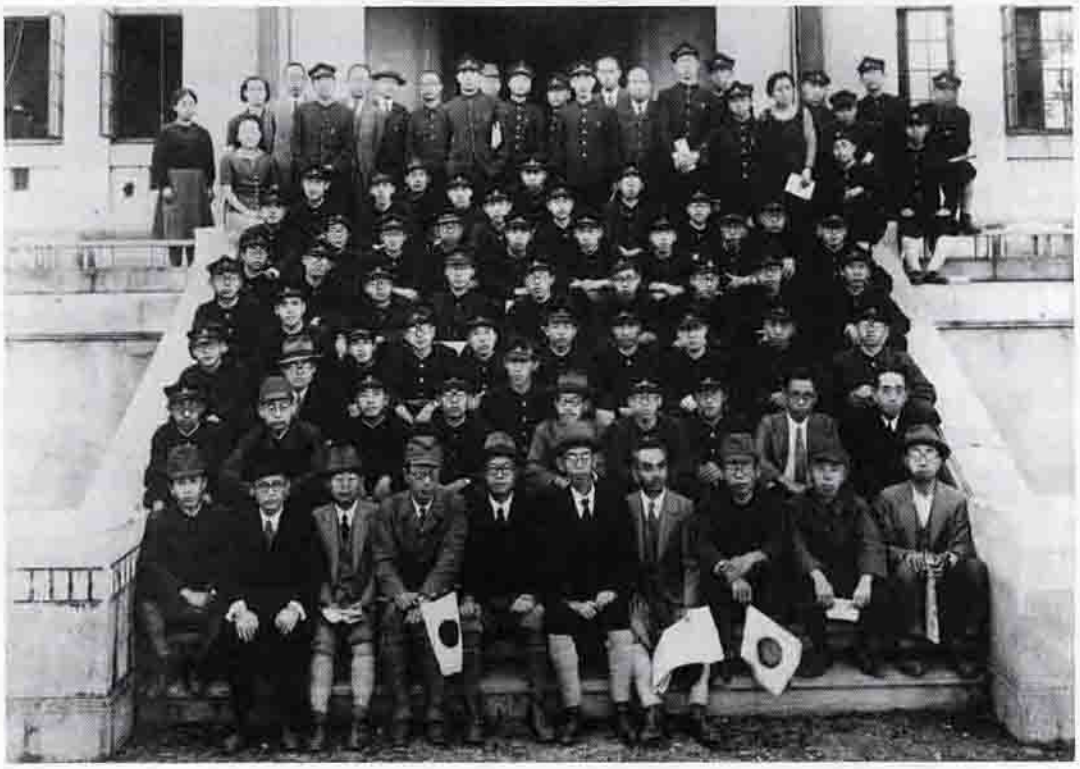
ISSN 0919-4339

九州大学
大学史料室ニュース

第25号　2005. 3. 31

目　次

九州大学と私……2
大学資料およびその調査収集・受け入れの現状と課題
—明治大学史資料センターを中心に—……4
九州大学史料収集・保存に関する委員会名簿…6
九州大学大学史料室名簿……7
大学史料室日誌抄録……7



法文学部文科の出陣学徒を囲んで（1943年10月19日）

太平洋戦争の戦局の悪化にともない、1943（昭和18）年9月、政府は学生生徒の徴集猶予の停止を閣議決定し、翌10月には勅令によって理工医系・教員養成諸学校以外の大学・高等専門学校の満20歳に達した学生生徒は一斉に徴兵検査を受け、12月には入営（陸軍）・入団（海軍）した。いわゆる学徒出陣のはじめである。本学ではこれに先立つ10月17日に、出陣学徒激励大運動会等を行い、同19日には工学部運動場において全学壮行会を開催した。この写真は、19日、法文学部文科の教官学生が出陣学徒を囲んで、学部本館玄関前で写したものである。

九州大学と私

田　村　圓　澄

1　法文学部の学生として

私が九州帝国大学法文学部に入学したのは、1938年4月、すなわち蘆溝橋事件の翌年であった。日本政府の不拡大方針の声明にもかかわらず、全面的な日中戦争が始まっていた。

現在の九大の正門を入ると、右側に旧図書館が、そして左側に3階の建物がある。これが法文学部であり、法・経済・文の三科が入っていた。法文経ビルは南面していたが、学生の出入口は東側にあり、地階の学生控室や賣店などに通じていた。

その上の1階に法文学部の事務室がある。晝休みの間、拡声器の音量を一段と高くして、「軍艦行進曲」が流れてくる。時々、別のメロディーが聞こえるが、これも瀬戸口藤吉作曲の「敷島艦行進曲」であった。

入学したわれわれ学生が、晝休み時の「軍艦行進曲」に、違和感をいだいたことはない。またこの軍歌のメロディーが、学生の話題になったこともない。これが当時の九大生の、日常生活のひとこまであった。

赤紙の召集令状により、赤襷をかけた法文系の学生・職員の応召者に対する壮行式が、月に1、2度、階段教室で行われた。東方遙拝に始まり、国歌合唱、法文学部長の壮行の辞、応召者の決意表明、そして万歳三唱で終る。壮行式は終始緊張していた。軍隊に入ることが、死を意味していたからである。

今から思うと、すべて決められたとおり、事は運ばれた。決められていたのは、1931年の満州事変以降の、日本の軍国化の道であった。

当時の国史専攻生は10名以内であった。国史研究室は国文研究室と同室であり、3階にあった。

九大に入学する以前から、私には2人の尊敬すべき師があった。和辻哲郎氏と金子大栄氏である。両先生から教を受けた弟子ではなく、いずれも書物などを通して、ひそかに師と仰いでいたにすぎなかったが、たとえば『日本精神史研究』などに見られるように、人間の本質に通じる、新しい意味、理念、そして思想が和辻氏によって発掘されている。それらは私にとって未知の世界であったが、私を引きつけ、根底から私をゆり動かし、そして私は先生の後を追いつづけた。

金子大栄氏の場合、私がいだいていた仏教とは異なる仏教が、そこにあった。金子氏の仏教によって、私は納得することができ、また同感することができた。つけ加えるならば、和辻氏の著述には、「自分」についての記述は少ないようであるが、金子氏において、衆生のなかの「自分」が、終始問題にされていた。

国史の専攻生となったが、私は合戦などの出来事よりも、思想つまり人の「言葉」に興味をもっていた。九大の国史学の二講座のうち、竹岡勝也教授は日本思想史の担当であった。

さて国史の長沼賢海教授の『日本書紀』の演習では、受講者はあらかじめ、『日本書紀』の巻頭から毛筆で書写し、これをテキストとして持参しなければならなかった。また竹岡先生は『古事記』演習を担当されたが、両先生の演習において、津田左右吉氏の研究をとりあげないことが、無言の鉄則となっていた。『古事記及日本書紀の研究』についても、津田氏の研究とその方法などに対し、学問的手続きによる批判を加えることもなく、その著書を、発禁処分に準ずるあつかいで対応をしていたといえよう。ただし私は研究室の書架にある津田先生の著作を読んだが、原典そのものよりも、原典の奥にひそむ人間の生命に、直接対話をしようとする和辻先生の方法に、心ひかれていた当時の私には、津田先生の学問に立ち入ることはできなかった。

竹岡先生の演習で、兼好の『徒然草』がテキストとして取りあげられたことが機縁となり、私は卒業論文「徒然草の思想」を提出した。

私は竹岡先生の講義などにより、神祇・神道の重要性に気付き、また本居宣長の「物のあはれ」論などにも興味をもち、これらの研究をしようと思った。

私の在学中、法文学部の「軍艦行進曲」のメロディーは止まなかった。

私が歴史に志し、試行錯誤・紆余曲折はあったが、今日まで研究をつづけることができた最大の理由は、私が九州大学を卒業したからである。卒業後も九州大学の存在と威光を後ろ楯にすることにより、いかに多くの恩恵を、受けていることであろうか。

九州大学への想いは、年とともに深まっている。

2　いま――三つの愚案

1966年10月から翌年4月までの半年間、私はバークレーのカリフォルニア大学に留学した。バークレーは湾をへだてて、サン・フランシスコと向きあっている。二万七千の学生をかかえる大学のキャンパスは、ユーカリやアメリカ杉でおおわれており、さながら森であった。

100メートル近いセイザー・タワーの時鐘が時刻を告げる。学生たちはこのタワーに親愛の情をこめ、イタリア語で「塔」を意味する「カンパニーレ」と呼んでいた。クリスマスが近づくと、学生会館の前に、5メートル大のクリスマス・ツリーが立てられ、カンパニーレはクリスマス・キャロルのメロディーを流す。カンパニーレに上がってみると、大学の職員が鉄琴をたたいていた。

晝休みの大学本部前は、ベトナム戦争反対の集会に参加する学生で埋まった。この集会は私のバークレー滞在中、毎日のように開かれていた。

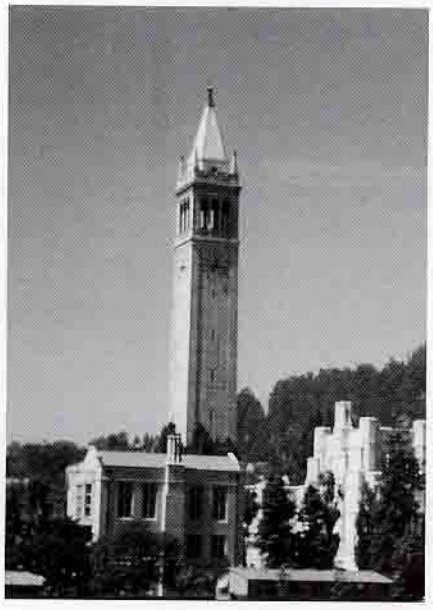
さて九州大学が百年の計の下に、新しいキャンパスに移転することになり、作業も始まっている。おくればせながら、これについて、三つの愚案を申させていただきたい。

第一は、新キャンパスにおけるタワーの建立である。九州帝国大学時代以降、学生・卒業生、九大病院の看護婦をふくむ教職員などで、戦（病）死をされた方がある。その方々の調査をし、追憶のタワーを新キャンパスに建てる。またこれを機会に、関係者の名簿を作成し、あわせて遺品などを収蔵し、展示する。もちろん旧朝鮮や中国出身の戦死者も、追憶のなかに加える。

このタワーは新キャンパスの中心部に設置し、時鐘をならす。ただし「戦争」を連想する名はつけず、また周囲の景観の造成に留意する。

アメリカの大学は、「学ぶ」場であると同時に、学生・職員また一般市民の「生活」の場であった。講演・音楽・ダンス・映画・演劇などの集会が毎夜開かれており、キャンパスは夜もあかるく、にぎやかであった。

これに関連して第二に、談話室を兼ねた喫茶室を、新キャンパスの各処に設置する。バークレーでは、どの建物にも喫茶室があり、中央図書館の喫茶室はひろく楽しく、壁面は大小の油絵で飾られていた。とにかく学ぶ「教室」と、憩い、かつ友と語りあう「喫茶室」は、大学成立の必須条件とさえ考えられていたのではないか。多数の外国



「カンパニーレ」

人留学生をかかえる九州大学においても、新キャンパスの随処に、上品で快適な喫茶室のあることが、いかに異境にあるその人びとの「人生」と「生活」を、潤すことになるであろうか。

ついでに、バークレーで驚いた、教室の机の配列について一言したい。私は太平洋戦争前の九州帝大法文学部の学生であったが、その当時の教室の机・椅子は、すべて縦一列に並んでいた。戦後、新校舎に移って横並びの配置となったが、教師として教壇に立ってみると、聴講者の私語に困惑する羽目になった。ところで私は、バークレーの教室が、九州帝大時代と同じく、縦一列に並んでいるのを見て驚いた。これでは講義中の私語はおこりえない。そのかわり、女子学生がシガレットを口にくわえると、通路をへだてた男子学生が、間髪を容れず、火のついたライターを差し出す光景にしばしば出会った。授業中の喫煙は、暗室以外では自由であったが、灰皿がないので、灰は床におとしていた。

第三は、「大学新聞」の刊行である。私が留学していた頃のカリフォルニア大学では、タブロイド型16ページの日刊学内新聞 “The Daily Californian” が刊行されており、大学の唯一の通用門であるセイザー・ゲートの傍に、毎朝、その日の学内新聞が積まれていた。

海外の留学生が集まる九州大学である。せめて週刊程度の大学新聞の刊行が望まれる。九州大学の新聞は、将来、留学生の母校と九州大学とを結ぶメディアともなるであろう。

新キャンパスにおけるタワーの建立、喫茶室の

設置、大学新聞刊行の活性化の三愚案は、九州大学の卒業生の衆智を集め、具体化されなければならない。九州大学の全卒業生は、「学部」の枠をはずし、この事業に参与・参加していただきたい。ともあれ我が九州大学は、開学以来、これらの事業に直接、また間接関与する、あらゆる分野の選士を育成し、社会に送り出してきたのである。

今回の事業の企画から、各方面に対する情報伝達をふくめ、すべて九大卒業生の結集・活動によらねばならないが、しかし事業の協力は、九大卒業生に限るべきではない。なるべく多数の一般の人びとに呼びかけることが望まれる。九州大学が、国内的・国際的な大学であることを、自他ともに確認するとともに、今回の事業が、さらに未来に向かって九州大学が大きく飛躍する機会になることを、念願したい。

（九州大学名誉教授）

大学資料およびその調査収集・受け入れの現状と課題
—明治大学史資料センターを中心に—

鈴　木　秀　幸

はじめに

大学史活動とは、大学史に関する資料の調査収集をし、整理保存、利用活用をすることであり、その活動をしていくための拠点・機関が大学アーカイヴズである。その形態は博物館・文書館・記念館、さらにはそれらの複合のもの等々、さまざまである。いずれにしても、大学資料（以下、資料）が活動の共通・基本にあり、それ抜きには存在は考えられない。

そして、その大学アーカイヴズの大学史活動において最始であり、あとあとの活動にまで影響を及ぼす資料の調査収集・受け入れについて述べるのが、本稿の主旨である。

1　大きな障害と問題

資料を得るに当って、理想と現実のはざまで誰もがすぐに突きあたる大きな問題がある。まずそのことを列記してみる。

(1) 人的な問題。多くの大学アーカイヴズの場合、地道でかつ重要なこの業務について、人手が足りないというのが実情である。

(2) スペースの問題。この収蔵室の確保は容易ではない。とくに都心型大学にあっては、ごく最低限の条件・環境をクリアーするだけでも精一杯である。

(3) 金銭的な問題。どのような形と方法で資料を得るにしても、その活動資金は必要であり、この経費にかなりの重点を置くべきである。このことは理屈の上では誰でも分っている。

(4) 法的措置の問題。多くの大学には文書保存規程はある。無い場合には作成を急がねばならないし、あれば、その法規をどのように生かすかが問題となっている。

理想論からいえば、資料の調査収集・整理保存を担当する多くのスタッフが、その豊富な資金で、次々と広い解荷室に運び込まれる資料を処理する。しかもそのことが制度として保障されていることである。しかし、それは努力目標にしかすぎない。そこで現実にはやや視点や角度を変えて、この問題を考えていかねばならない。

2　大学文書館と大学資料館

すでに述べたように大学アーカイヴズといってもさまざまな目的・形態があり、それはそれでよい。とはいえ、大きく区分けすると、文書に力を入れた大学文書館型と、歴史的な資料による大学資料館型の２つである。前者は、モンジョカンとブンショカンという呼称により、若干異なるが、大学文書館では、ブンショカン、つまり学内行政文書を扱うところがほとんどである。一方、大学資料館の方は、行政・事務文書よりもモノ資料・私資料・周辺資料をかなり重視しているところが多い。大学行政文書館に対して大学歴史資料館という表現は端的かもしれないが、分りやすい（もっとも例えば大学行政文書館が歴史資料を扱っていないというわけではないし、双方の機能を同等に持とうとしているところもある）。ここのところはその大学アーカイヴズにとって大きな決断が迫られる。やはり、その設置主体・設立経緯・活動目的・地域等々により、規定される。

明治大学史資料センターの前身は百年史編纂委員会および歴史編纂事務室である。その後、さま

ざまな経緯を経て、2003年4月に明治大学史資料センター（以下、当センター）として発足した。結論からいえば、大学史料館とするか、大学史資料館とするのか、あるいは大学史資料センターとするかという議論はあったが、文書館はなかった。すなわちさきの大学アーカイヴズの分類でいけば、資料館型である。現在、当センターでは年間約20の項目を業務としており、それを月別に割り振り、スムーズに流れるように務めている。しかし、それでも時間に流される嫌いがある。そのために、業務分野を編纂、展示、情報サービスに、さらに対象項目を創立者、校友、地域地方に特化している。それを例えば創立者に関する編纂といったように組み合せるわけである。資料館としてこうした内容を活動の中心としているが、かといって現在の行政・業務資料を軽視することはできない。なぜならばそれら資料はやがて歴史資料になるからである。ただ、ここでは、その大学アーカイヴズの力点の置き方、つまり特色化を論じたのであり、またそれにより、先述の大学アーカイヴズ関係資料収集上の障害・問題解決の糸口ともなると思えたからである。

3　学内資料と学外資料

大学史関係の資料はどこに存在するのかという場合に、容易に考えられるのは、学内資料と学外資料とに分けてみることである。文字どおり前者は学内の各機関・部署にあるものであり、後者は学外の機関・家などにあるものである。ところで、この資料の所在はそれを求める者に対し、自然と2つの意識や姿勢をとらせることがある。ひとつは、ねらいを定め、資料の調査・整理の道具をかついで、探し出したり、複写したり、筆写をしたりする。原則として資料は現地保存主義なので資料を受け取ることはしない。この場合は、学内よりもむしろ学外、例えば図書館・博物館・編纂室・家を対象とすることが多い。歴史学の世界でいう調査収集である。

もうひとつの意識・姿勢とは、資料を受け取る場合である。このことについて、当センターにおける実態を紹介すると分りやすい。例えば学内回覧や情報システムによる伝達はいうまでもなく、調査課や庶務課などが作成する基礎データ、広報部による校報や記事作成のための資料、あるいは文書課からの業務日誌等々である。これら定期的なものに対して、不定期なものは枚挙にいとまがなく、ほとんどの学内機関・部署・関係者から届けられるといってよいし、また今後定期化していかねばならない。この場合は調査収集というよりも受け入れといった方がよい。

大学資料館の色彩が強く、またそれに似合う事業・業務を特化している（既述）当センターでは、学内資料だけではなく、学外資料の調査収集にかなり力を入れているのが現状である。

4　業務資料と業務外資料

ここでは、大学アーカイヴズには、どのような資料が入ってくるのか、記したい。一口に資料とはいえ、例えば形態上では、文書、新聞雑誌、写真、モノ、書籍等々がある。

資料の内容上から見れば業務資料と業務外資料とがある。前者は日々、学内の機関や部署で作成される学内行政文書といえば分りやすい。一方、後者はそれ以外のもの、あるいは業務資料であっても古文書のようなものを対象とする。例えば創立者、役員教職員、校友、サークル、ゼミナール、地域関係等々のもので、一般に歴史資料の類である。

すでに述べたように大学資料館としての色彩の強い当センターにあっては、業務資料に比べて、業務外資料を調査収集する機会が多い。もちろん業務資料を対象としていないわけではないし、さらに両者の資料を明確に区分しがたいケースもあるが、いずれにしても、その大学アーカイヴズの目的・機能・役割によって比重の置き方が異なってこよう。

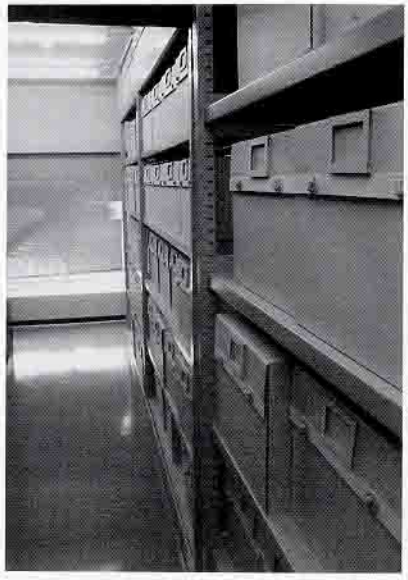
5　学内業務資料の受け入れ

とはいえ、当センターは学内業務資料の受け入れに、さらに力を入れていかねばならないと思っている。それは、大学アーカイヴズにとっては大きな使命であり、また当センターが事業分野に「情報サービス」をうたっているのはそのことを意識しているからである。

理想としてはやはり学内の業務資料がスムーズに移管されてくることであるが、すでに述べた障害・問題等々により、そうではないのが現状である。しかし、スムーズならしめるために、考え、実行しなければならないので、その実例のいくつかを列記してみる。

(1)学内の各機関・部署の資料の把握

学内の各機関・部署に出向き、資料所蔵の現状を把握しておくことが重要である。そうしたことにより、当センターでは、その機関・



明治大学史資料センター資料室

部署で資料を整理し、目録の共有化につとめてきた。

(2)特化した学内業務資料の受け入れ

生産される全ての学内業務資料を全て受け入れることが可能ならよい。しかし、すでに述べたような障害・問題があれば、掲げている業務分野・対象項目をもとに対象資料を特化する必要もある。当センターはそのようにしている。

(3)複写・複製の推進

学内ですら永久保存文書とか重要資料を収受することはかなり難しい。その場合、当センターでは積極的にマイクロ撮影や複製につとめている。このことは移管の困難さを実質的に解決できるだけでなく、複数保存により災害等に対応することができる。

(4)理解者の存在

学内教職員には必ずいく人かの大学史活動に対する理解者がおり、所属するところの学内資料移管に協力してくれる。こうした人達と普段連絡をとり合うと共に、やがては連絡会・友の会を組織できればよいと思う。

また筆者は新任職員研修の講義の際には、学内資料の重要性と当センターの存在を強くうったえるようにしている。

(5)資料利用規程の制定

目下、当センターでは、センターつまり資料の利用規程制定を急いでいる。「とっておく」保存規程に対し、「使ってもらう」この規程は、資料の調査収集・受け入れを進んでしなければならないという使命感を強く持たせる。さらには資料収受規程や廃棄規程の制定を考えねばならない。

このほかにも、退職教職員への寄贈依頼、展覧会開催による資料収集、特別行事・事件等の際の資料収集などが事例としてあげられる。

むすび

本稿ではまず大学史活動の拠点・機関である大学アーカイヴズにはさまざまな種類・形態があるが、いずれにしても資料抜きには考えられないこと、しかしそれらのほとんどは資料収集上、大きな障害・問題をかかえていることを指摘した。そのためには大学アーカイヴズおよびその資料に対して一定の理念や観点をもたねばならないとして、まずは大学アーカイヴズを行政文書を扱う文書館型と歴史資料を主とする資料館型に分けた。次に資料の所在について、学内資料と学外資料とに区分すること、そこから自然と表出される意識・姿勢（調査収集と受け入れ）のことにも及んだ。次に資料の内容について、業務資料と業務外資料に区分してみた。前者は比較的、学内行政文書が多いのに対し、後者は学外、そして文書以外の資料であることが少なくない。このことからすれば当センターの場合は、資料館型＝学外資料＝調査収集＝業務外資料という構図になる。もっとも何型だから何の資料は扱わなくてもよいということではない。それは定めたことに重点を置きつつも、補完しなければならないのである。その意味でも最後に当センターの学内業務資料の受け入れ方法について、具体的な事例をあげた。しかし、そこに絶対的結論は提示できなかった。できないというより、ここで例示したような日々の活動の試行錯誤と積み重ねによってベターを求めるしかないのである。

（明治大学史資料センター）

九州大学史料収集・保存に関する委員会名簿

委員長	理事	副学長	今西裕一郎	委員	人文院	助教授	山口　輝臣
副委員長	人環院	教授	新谷　恭明	〃	比文院	助教授	中野　等

委　員	言文院	助教授	高橋　勤	委　員	博物館	教授	岩永　省三
〃	歯　院	教授	飯島　忠彦	〃	情基セ	教授	藤野　清次
〃	歯　院	教授	前田　勝正	〃	健　セ	教授	橋本　公雄
〃	シ情院	教授	長谷川隆三	〃	総務部	部長	安間　敏雄
〃	農　院	教授	江頭　和彦				
〃	先導研	助教授	本山　幸弘				

（2005年３月１日現在）

九州大学大学史料室名簿

室　長	理　事	副学長	今西裕一郎	兼　任	法　院	助教授	熊野　直樹
副室長	人環院	教授	新谷　恭明	〃	経　院	教授	荻野　喜弘
専　任		助教授	折田　悦郎	事務職員			北島　一孝
兼　任	人文院	助教授	佐伯　弘次	事務補佐員			松尾　陳代
〃	比文院	教授	有馬　學	〃			筑紫　啓子
〃	法　院	教授	植田　信廣				

（2005年３月１日現在）

大学史料室日誌抄録（2004年７月～2004年12月）

7．1（木）　山本晴樹別府大学文学部教授、大学史料室視察のため来室。

7．14（水）　「大学とは何か―ともに考える―」の一環として、箱崎地区（キャンパス）見学を実施（折田助教授説明）。

7．16（金）　塩川郁夫氏（元本学技官）来室、資料寄贈（11月29日も同様）。
学務部学生生活課より資料受領。

7．21（水）　馬被健次郎九州工業大学情報工学部教授、加治淳一同大学附属図書館事務長、来室（九州大学七十五年史編集事業調査の件）。

7．23（金）　瀧井一博兵庫県立大学経営学部助教授、資料調査のため来室。
外川健一石炭研究資料センター助教授来室、資料寄贈。

7．28（水）　第23回文化財ワーキンググループ開催（折田助教授出席）。

7．29（木）　坂本辰朗創価大学教育学部教授、大学史料室視察のため来室。

8．2（月）　時里奉明筑紫女学園大学助教授、大学史料室視察のため来室。

8．3（火）　水崎雄文氏（文学部卒業生）、資料調査のため来室、資料寄贈（8月24日、12月8日も同様）。

8．6（金）　下田守下関市立大学経済学部教授、資料調査のため来室（11月1日も同様）。

8．20（金）　西日本新聞記者、取材のため来室（8月25日、9月22日、12月2日も同様）。

8．23（月）　第3回九大ブランド・プロジェクトチーム会議開催（折田助教授出席。12月15日第5回会議も同様）。

8．24（火）　NHKエデュケーショナルより旧心理学棟の件につき照会、資料送付。

8．26（木）　木村京子氏（文学部卒業生）、資料調査のため来室（11月1日も同様）。

9．9（木）　筑紫地区事務部（健康科学センター）より資料移管。

9．13（月）　福岡市東区東箱崎公民館（ふれあい大学）よりキャンパス見学のため来学（20名）、折田助教授案内。
東定宣昌名誉教授、資料調査のため来室。
システム情報科学府同窓会より資料寄贈。

9．14（火）　青陵会（旧制福岡高等学校同窓会）幹事会例会開催（折田助教授出席）。

9．18（土）　川添昭二名誉教授、大学史料室視察のため来室。

9．27（月）　下野信行九州大学病院第一内科医局長、資料調査のため来室（10月4日、11月5日も同様）。

10．4（月）　土井浩嗣聖和大学人文学部非常勤講師、資料調査のため来室。

文学部同窓会より資料寄贈。
医学部同窓会より資料寄贈。
歯学部同窓会より資料寄贈（10月6日も同様）。

10. 6（水）　折田助教授、2004年度全国大学史資料協議会総会・全国研究会に参加（～8日。於京都大学大学文書館）。

10. 8（金）　農学部同窓会より資料寄贈。

10.12（火）　工学部壬子会（同窓会）より資料寄贈。
薬学部同窓会より資料寄贈。

10.18（月）　法学部東京同窓会より資料寄贈（11月26日も同様）。
工学部親和会（同窓会）より資料寄贈（11月17日も同様）。

10.21（木）　比較社会文化学府等事務部より資料受領。

10.25（月）　坂井猛新キャンパス計画推進室助教授、古賀源士福岡市整備局大学移転対策部計画課第二係長、来室（箱崎キャンパス調査の件）。

10.27（水）　折田助教授、第30回全国歴史資料保存利用機関連絡協議会全国大会及び研修会に参加（～29日。於山口県総合保健会館）。

10.28（木）　山口英一有明工業高等専門学校助教授、資料調査のため来室（12月9日も同様）。

11. 7（日）　折田助教授、広島大学文書館設立記念シンポジウム「文書館における学問と社会的役割」に参加。

11.10（水）　吉村日出東明治大学文学部兼任講師、大学史料室視察のため来室。
受託中のラグビー部関係資料返却。

11.14（日）　折田助教授、第38回九州寮歌祭に参加（於ソラリア西鉄ホテル）。

11.16（火）　大学院工学研究院応用化学部門より資料（実験機器等）受領。

11.25（木）　財務部資金管理・執行課より資料移管。

11.26（金）　二見剛士志學館大学人間関係学部教授、大学史料室視察のため来室。

11.27（土）　新谷副室長・折田助教授、2004年度九州教育学会に参加（～28日。於九州大学）。

12. 1（水）　大森裕子氏（京都帝国大学福岡医科大学初代学長大森治豊令孫大森陽氏夫人）、荒川和生氏（第6代総長荒川文六令孫）へ感謝状送付。

12. 6（月）　九州大学病院別府先進医療センターより資料受領。

12. 8（水）　荻野富士夫小樽商科大学商学部教授、大学史料室視察のため来室。

12.14（火）　総務部総務課より資料受領。

12.17（金）　岩本桂（経済学部卒業生）・越智一男（法学部卒業生）氏、大学史料室視察のため来室。

12.18（土）　折田助教授、医学部同窓会誌「学士鍋」座談会出席（於福岡市三鷹ホール）。

12.20（月）　第2回記録資料館・大学史料室検討ワーキンググループ開催。

12.22（水）　毎日新聞社鹿児島支局より初代福岡高等学校（旧制）校長の件につき照会、回答。

12.27（月）　川添昭二名誉教授（九州大学五十年史執筆者）にオーラルヒストリーを実施（有馬學教授、折田助教授）。

九州大学大学史料室ニュース　第25号
Kyushu University Archives

発行日　2005年3月31日（年2回刊）
編集
発行　九州大学大学史料室
〒812-8581 福岡市東区箱崎6－10－1
電話・FAX　(092) 642-2292
印刷　株式会社ミドリ印刷